

論文要旨

ライトノベルにおける文章の計量的研究

国際日本学研究科 国際日本学専攻

日本語学日本語教育学研究領域

4911194005

土屋 葵

修士論文要旨

本論文は、物語作品の中で一つのジャンルを確立しているとされている「ライトノベル」を対象にし、その文章が他の物語作品とどのように異なっているのかを計量的に分析したものである。

本論文は全6章から構成されており、I章、II章は序章として本研究の背景や方法について述べ、III章、IV章はそれぞれ品詞と文末についての分析を行い、V章ではそれらの結果を受けて考察を行い、VI章では本論文の総括と課題を述べた。

I章では、研究背景、先行研究および研究目的を記述した。従来、ライトノベルの研究は物語の外部に言及するものと、その内部の特徴について言及するものの2つが行われてきた。外部に言及するものは、ライトノベルの商業的価値や社会的地位など、日本社会やオタク文化の中でどのように認識されてきたのか、という点を対象としている。内部に言及するものは、物語の構造や登場人物の造形などに目を向けるものがあつた。また、ライトノベルの言葉に注目したものとして、榎本(2008)、及川(2009)、大橋(2014)での短い指摘や、メイナード(2012)での体系的なライトノベルの言語研究が挙げられる。

榎本(2008)、及川(2009)は『スレイヤーズ』の発話文について特に言及し、会話や記号が多く、文が短いということを指摘し、これがライトノベルの物語のテンポを速めているとしている。大橋(2014)は発話文がマンガ、アニメーション的であり、地の文は話し言葉的な「ラフ」な表現をしており、これにより読み手と作り手の距離を近づけていると指摘している。

メイナードはライトノベルの文章表現を対象にした言語学的な研究であり、ライトノベルの文章を「会話体文章」とであると結論付けている。ライトノベルは発話文において実際の発話のような表現が使用され、地の文においても発話的な表現が豊富に使用されることで心内発話など、語り手が「会話」をしているような文章になっていると指摘している。

また、ライトノベルの内部と外部を数量的に分析したものとして、特に太田ほか(2013)がある。この研究は、先行研究で指摘されてきたライトノベルの特徴を、発話文の数や文章の長さといった「文章のスタイル」という内部的な項目と、メディアミックスや挿絵の有無といった「出版のスタイル」という外部的な項目を設定し、数量的に日本語フィクション物語小説(本研究での小説)との比較を行っている。調査の結果、ライトノベルとそれ以外の物語は「出版のスタイル」による差が大きく、「文章のスタイル」は両者を分ける指標にはならなかったことを指摘した。

これらの研究では、文章表現だけに注目し、さらにそれをある程度の作品数を確保した上で数量的に比較していない点が問題であると考えられる。

そこで、本研究では、「①ライトノベル作品群と小説作品群を計量的に比較し、ライトノベルの文章表現の特徴がどの点に現れているのか客観的に明らかにする」「②これによって、ライトノベルがどのような表現で記述されるの物語なのか考察する」ことを目的とした。

II章では、対象とする作品群の選定と、研究方法について述べた。本研究では文章のジャンルの違いをより明確に明らかにするために、コーパスを用いた計量的な分析を、大きく、品詞と文末の2つの指標に対して行っている。本研究では、ライトノベルは人気ランキングの「このライトノベルがすごい！」の歴代1位作品を対象とし、15作品を対象とした。品詞の分析では、全体からランダムに40ページを対象とし、電子化したデータを、形態素解析用辞書「現代書き言葉 UniDic」を用いて「Web茶まめ」によって形態素解析したものを使用している。また、文末の分析では、冒頭のモノログなどを除外し、物語が始まる第一章から20ページ前後の連続した部分を対象としている。対照作品群としては国立国語研究所の構築した「現代日本書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」の「出版・書籍サブコーパス」コアデータから、日本文学作品となっている11作品を対象とした。

III章「品詞」では、樺島・寿岳(1965)を参考に、品詞をN(名詞、代名詞)、V(動詞)、M(形容詞、形状詞、副詞、連体詞)、I(感動詞、接続詞)、付属語(助詞、助動詞)の5つに分類し、その比率を分析している。本研究ではまず、延べ語数、異なり語数から、どのような品詞によって表現されているのかを比較している。その後、樺島・寿岳(1965)の示したMVRを使用することで、V類とM類の関係、そしてN類を組み合わせるとライトノベルと小説の文章を比較した。延べ語数、異なり語数において、ライトノベルは小説よりも発話文、地の文のどちらもN類、I類の割合が高く、付属語の割合が低くなっており、「骨組みを述べる語、また読み手に具体的なイメージや感情を引き起こす語、文の発信者の感情を表す語」が多く、またその種類も豊富であると言える。また、MVRとN類の比率の比較では、ライトノベルの発話文は小説よりもN類が高く、MVRが低いから、ことからの大枠や骨組みを主に扱う「要約的な文章」であり、地の文はN類が高く、MVRも高いから、「要約的」かつ、ものごとの質や状態を描く「ありさま的」な文章であることが分かった。そして、発話文と地の文の数値の差を「乖離度」と考えて比較したところ、ライトノベルの数値は小説よりも小さく、発話文と地の文の差があまりないことが分かった。

IV章「文末」では、文末全体を概観し、その中で特に「テンス形式」と「助詞」について分析をした。まず、文全体に対して文末が「付属語」か「自立語」か、という点で比較をし、その後、文末の付属語のうち「助動詞」か「助詞」という比率を比較した。比較の結果、ライトノベルの発話文、地の文は小説よりも付属語で終わる文の使用が少なかった。また、発話文において助詞の割合が低く、地の文では助詞の割合が高くなっていった。続いて、助動詞の中で最も使用が多かった「た」に注目し、「た」を有する「過去形」の文とそれがない「非過去形」の文というテンス形式の比較を行った。その結果、ライトノベルの発話文、地の文は小説よりも「非過去形」の文の使用が多かった。そのため、ライトノベルは文の発信者が出来事の事態を実況的に述べる文章であると考えられる。次に、全文に占める文末の助詞の比率と、助詞の中でもどのような種類の助詞が使用されているのか、という点を比較した。ライトノベルは発話文において助詞の比率が小説よりも低く、地の文は比率が高くなっており、その中でも発話文は終助詞、接続助詞の比率が小説よりも低いから、地の文は高くなって

いる。発話文において文末に助詞が使用されることは自然であるが、地の文でも小説より多く使用されている点はライトノベルの特徴である。特に終助詞、接続助詞に注目すると、地の文で使用される時、心内発話のように読み取れたり、また文に余韻を持たせることで読み手に続きを考えさせるなど、読み手に対して働きかけをしていることが考えられる。そして、そのような文が実際の発話文で使用されるため、ライトノベルの地の文は小説よりも発話に近い文章であると言える。さらに、テンス形式と助詞の使用率について、発話文と地の文の差で乖離度を比較した結果、ライトノベルの数値は小説よりも低く、発話文と地の文の文末の差があまりないということが分かった。

V章では、III章、IV章の結果を受けて、ライトノベルの文章の考察を行った。本研究ではライトノベルが小説よりも「発話文と地の文の境界が曖昧である」ということを結論付けた。発話文と地の文が近い品詞率、文末表現の使用率であり、それによって発話文と地の文が曖昧になり、地の文においても感情的な表現や実際に発話しているような表現が多用される文章がライトノベルの特徴であると考えられる。

VI章では本論文のまとめをした後、課題を記述した。課題を大きく2点あり、①調査対象、規模の選定が2つのコーパスで異なっているために、②細かい表現まで言及できずに表面的な記述にとどまっていることである。本研究のテーマを発展させるためには、比較対象も含めてより大規模なデータを代表性を保って作成し、また物語作品であるため、場面や文の表す内容など、品詞や文末表現にとどまらない文章の意味などとも関連付けて分析を行うことが必要であると考えられる。